

2021年2月1日発行  
www.tokushukai.jp

発行 ■ 一般社団法人徳洲会  
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階  
TEL : 03-3262-3133  
制作 ■ 一般社団法人徳洲会 広報部  
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階  
TEL : 03-3288-5580 FAX : 03-3263-8125  
Email : news@tokushukai.jp

# 徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

ALL LIVING BEINGS  
ARE CREATED EQUAL

1/FEB.2021

No.1272

最大積雪深97cmと記録的

## 職員協力し通常診療堅持 庄内余目病院

昨年末から1月上旬にかけて断続的に強い冬型の気圧配置となり、とくに日本海側は広い範囲で大雪に見舞われた。こうしたなか、庄内余目病院（山形県）は職員が協力して積極的に駐車場の除雪作業を行い、診療に支障を来すことなく患者さんに対応した。



送迎車は雪だるま状態。懸命に除雪を行う

東北・北陸地方では1月7日頃から再び寒波が襲来。大雪の影響により、大規模停電や高速道路で1,000台超の車が立ち往生するなど、大きな被害をもたらした。

同院がある余目地区も、とくに9～11日の3連休は24時間降雪量が45cmと記録的な大雪。例年、30～40cmほどの最大積雪深は97cmにまで上ったという。各所で除雪作業が追い付かず、道路の通行止めや航空機の欠航、鉄道の運休など交通にも大きく影響した。

こうしたなか、同院は通常の診療を維持しようと職員が積極的に協力して除雪作業を行ったり、ふだんの倍の時間がかかりながらも患者さんの送迎を行ったりした。

「来院するには車が欠かせないだけに、駐車場は、患者さんにはもちろん職員にも重要です。除雪車が来たものの、降り続く雪に除雪が追いつかない状況のため、手の空いている事務職員20人ほどが朝8時前から3時間かけて駐車スペースの確保や、夜勤明け職員の車などの除雪に努めました」と遠藤豊喜・企画課課長。また、送迎職員が独居高齢患者さんの家の前の除雪作業などを行ったり、医局秘書が天候の状況を確認しながら非常勤医師らの移動・宿泊の調整に尽力したりした。

多くの職員の協力で雪による事故もなく、ふだんと変わらない診療を遂行。遠藤課長は「今回の経験から、とくに駐車場の整備は必要だと感じました。当院は新築移転を検討しています。たとえば屋根付きの立体駐車場など、患者さんや職員のために、駐車場についても考えていきたい」と意欲を見せている。

ムカパ病院は、アフリカ東部に位置するタンザニア



タンザニア人スタッフのみで腎移植を初めて実施(20年3月)

ニアの首都ドドマに立地。国立ドドマ大学の敷地内に建つ。以前は同大学付属病院だったが、18年に管轄が同国の教育省から保健省に移行。その後もムカパ病院とドドマ大学の間で人的交流が続いている。

現地スタッフのみによる腎移植手術は、ムカパ病院で20年3月に1例目

を遂げた。16年に同国保健省から徳洲会に対し、次のステップとして腎移植

## 近隣諸国へ技術指導も期待

ニアの首都ドドマに立地。国立ドドマ大学の敷地内に建つ。以前は同大学付属病院だったが、18年に管轄が同国の教育省から保健省に移行。その後もムカパ病院とドドマ大学の間で人的交流が続いている。

直近3例のレシピエン（臓器受給者）は、透析導入から3～5年が経過した慢性腎不全の患者さんたち。2例は40代男性で、ともに兄弟間の移植。もう1例は20代女性で、兄妹間の移植だった。

命だけは平等だ”の理念を掲げ、国内にとどまらず海外、とくに医療が充実していない国々に対する支援を積極的に展開。タンザニアに対しては13年、技術指導や研修の受け入れ、透析機器の寄贈などを経て、ドドマ大学付属透析センターの開設を支援。

を実施したのに続き、同年6月に1例、同年11月に3例の計5例をこれまでに実施。いずれも無事に終了した。

命だけは平等だ”の理念を掲げ、国内にとどまらず海外、とくに医療が充実していない国々に対する支援を積極的に展開。タンザニアに対しては13年、技術指導や研修の受け入れ、透析機器の寄贈などを経て、ドドマ大学付属透析センターの開設を支援。

タンザニア

# 現地スタッフのみで腎移植を実施

長期にわたる徳洲会グループなどの支援が結実

アフリカのタンザニア連合共和国にあるベンジャミン・ムカパ病院に対する徳洲会グループと東京女子医科大学共同の腎移植支援プロジェクトが実を結び、現地スタッフのみによる腎移植手術が実現している。徳洲会グループは同国に2013年、技術指導や透析機器の寄贈などを行い透析センターの開設を支援。その後、同国からの支援要請にこたえ、腎移植のサポートを開始。医療者の派遣や日本国内でのタンザニア人スタッフの研修受け入れなど行ってきた。これまで徳洲会と東京女子医大のスタッフが現地スタッフをサポートしながら11例の腎移植を施行、技術移転を進めた。20年3月以降は、検査結果の確認などの支援を継続しているものの、手術に関しては同国のスタッフのみで取り組んでいる。

植実施のための支援要請があった。その当時、同国では腎移植を実施できる施設がなく、移植希望者はインドなど国外で移植を受けていた。腎移植の実績が豊富な東京女子医大から協力が得られたことから、徳洲会は支援要請にこたえ腎移植プロジェクトをスタート。同国では移植医療に関する法制度が未整備だったため、法制度の整備を



徳洲会と東京女子医大のスタッフが手術に参加し技術移転(18年8月)

同国政府に求めるなど移植医療環境の整備に努めた。また、ムカパ病院の医師や看護師などに対する日本での研修と並行し、徳洲会スタッフが手術室やICU（集中治療室）の準備、患者選定に必要な検査の指導などのため、数回にわたって現地を訪問した。

20年3月には、初めて同国医療者のみによる腎移植手術を実施した。一般社団法人徳洲会国際部のムワナタンブエ・ミランガ・アフリカ担当顧問は「腎移植を希望されるタンザニアの患者さんに、国外に出向くことなく腎移植を受けられる機会を提供できるように

なりました。現地スタッフのみで手術を実施できるようになったことは大きな進展です」と喜びの声を挙げる。続けて「18年8月に行った手術では、コンゴとギニアの医師が見学のため参加しました。そのコンゴ人医師が自国からドナー（臓器提供者）」とレシピエントをタンザニアに連れて腎移植を行う計画があると聞いています。今後、タンザニアが周辺地域の腎移植の拠点として患者さんに貢献し、将来的には近隣国に対し腎移植の技術指導を行えるようになるのが理想です」と展望している。

## 笑顔で走った15年

吉河「さらに地域に貢献へ」

開院記念



「これまで歩んできた道を崩さず進みます」と福江院長

古河総合病院（茨城県）は昨年7月、開院15周年を迎えた。開院当時から院長を務める福江眞隆院長は「常勤医が2人しかいない状況で開院しましたが、今では20人近くに、診療科も増え、病院として安定してきました。2021年4月には耳鼻咽喉科も開設予定で、さらに地域に貢献できる病院になります」とアピールする。

同院は急性期から慢性期、回復期までカバーするケアミックス病院。18年2月に法人名が医療法人茨城愛心会から医療法人徳洲会に代わる際、現在の古河総合病院（旧・古河病院）に名称変更したのも、より地域のニーズに応え、充実した医療を提供したいという意味を込めている。

回復期リハビリテーション病棟は開棟当初の30床から、現在は36床に増えた。周囲には急性期病院が多いため、同病棟は地域のなかで重要な役割を果たしている。早期離床・早期退院を目指し、退院後の生活を見据えたリハビリに注力。ケアミックス病院だからこそできる丁寧なケアは、患者さんや地域の医療機関にも好評だ。

同院のモットーは「Any time with a smile」。笑顔で仕事をしたいほうが、患者さんにとっても職員にとっても幸せだという福江院長の考えによる。その後について福江院長は「臨床研修指定病院を目指すとともに、介護老人保健施設や特別養護老人ホームなど付帯施設も充実させていきたい。これまで歩んできた道を崩さず、20周年を盛大に祝えるように頑張ります」と意気軒高だ。



自院ホームページに15周年記念ページを開設